先端科学技術研究科　修士論文要旨

所属研究室 （主指導教員）	計算行動神経科学 （田中　沙織　（特任准教授））		
学籍番号	2311191	提出日	令和 7年 1月 21日
学生氏名	中川　綾子		
論文題目	個人特性とスマートフォン使用目的の多変量データによる問題のあるスマートフォン使用の分類		

要旨

スマートフォンの急速な普及に伴い、問題のあるスマートフォン使用（Problematic Smartphone Use, PSU）が心身に悪影響を及ぼすとして社会的に問題視されている。PSUはインターネット・ゲーム依存のように依存症として研究されるようになったが、未だDSMやICDなどの従来の診断基準では依存として認められていない。これは、スマートフォン使用を習慣と依存の区別が難しく、PSUが時間に必ずしも比例しないことなどが原因の一つとして報告されている。

そこで、本研究では、スマートフォン使用目的毎の主観的な頻度(使用目的スコア）に基づいてPSUを分類し、個人特性やスマートフォン使用に関する幅広い指標から各クラスターの特性を明らかにすることを目的とする。

スマートフォン使用目的スコアを因子分析した結果、6つの因子（第1因子：暇つぶし利用、第2因子：コミュニケーション利用、第3因子：金融・取引利用、第4因子：エンターテインメント利用、第5因子：生活効率化利用、第6因子：読書・学習利用）が抽出された。さらに、それらの因子得点を基に潜在プロファイル分析（Latent Profile Analysis, LPA）を用いて4つのクラスター（バランス型、堅実・慎重型、多目的・衝動型、低積極利用型）を特定した。

スマートフォンの依存的な使い方という観点から、バランス型は平均的な利用パターンを示し、依存リスクが低いと考えられる。堅実・慎重型は抑制的な利用が特徴で、依存リスクも低い。多目的・衝動型は高い依存リスクを有し、衝動性と多様な利用が組み合わさっている。低積極利用型は依存リスクが最も低いものの、高い疲労度を伴う。

これらの結果から、PSUは多様な利用パターンを持つ複数のクラスターに分類可能であることが示された。本研究の結果を精査することで今後各クラスターの特性に基づいた介入策の提案の基盤に貢献することができると考えられる。